

親と子で語る

つつのみやの 民話

栃木の民話語り
かまどの会



随想舎

で親
語る子

つつのみやの民話

栃木の民話語り かまどの会

随想舎



9784887482340

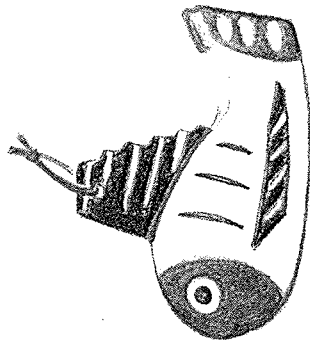


1920039010001

【定価】 本体 1,000円＋税

ISBN978-4-88748-234-0

C0039 ¥1000E



むかしむかしの宇都宮はな、田畑が広がって、水のきれいな小川や池が沢山あったと。子どもたちはな、沢ガニやアサを獲っては、元気いっぱい遊び回っていたんだと。お母たちは、その小川でな、野菜や茶わんまでも洗っていたんだと。じいさまやお父たちもひまを見つけちや田川に行って、魚を釣っては隣近所に配ってな、晩飯のおかずにしたと。まるで村のみんなはみんな親せきみてえに仲よくくらしていたんだと。

ところが、村ん中におつかねえはやり病が広がって、高熱が続いてよ、体じゅうはできもんだらけになったんだと。小さな子どもや、じいさんばあさんが次々に死んでしまってな、毎日村のどこかで葬式があったんだと。

今でいう天然痘という、人にうつる病気のことなんだがな、病のこともなんもわからねえし、薬もなかったんだと。村のみんなは、病気の家には近寄らなくなってな、みんなうちの中ではやり病にならないようにお祈りしていたと。子どもの遊ぶ声も聞けねえし、村は静まりか

えってしまったと。

ある日、信心深い若夫婦の息子が、はやり病にかかってしまったと。高熱が続いて、だんだんやせ細っちゃったと。お母が

「坊やどうした。元気をだしておくれ。」

声かけても答えねえで、泣きながら暮らしたと。

「そうだ、生きのええ魚を釣ってきて、なんとか坊主を元気にしてやんべ。」

お父はすぐに田川に行つたんだと。その日は、一匹も魚はかからなかったと。

「仕方がねえ、まだ明日にでもくんべ。」

すつとそんな時、竿がぐいと引つ張られたんで上げてみるとよ、今まで見たことのええ黄色いでつけえアサがかかっていたんだと。



「これはめずらしいしいフナだ。神様の贈り物かもしれないねえ。」

さつそく息子に食べさせると、その黄色いフナを喜んで食べた。

なんと次の日にはな、熱がすっかり下がって、おできもなおり始めたんだと。そのうわさが村中に広がってな、みんな田川に黄色いフナを釣りに出かけた。

しかしな、黄色いフナはなかなか釣れなくなつた。そこで、はやり病がなおった村人がお礼に張子^{はりこ}の黄ぶなを作つて、軒下につるすと、はやり病がいつの間にか無くなつた。

今でも病気にかからないように、正月初めや一月十一日の初市に買った張子の黄ぶなを軒下につるしてな、その後神棚^{かみだな}に供えるようになったんだ。

黄ぶなはな、今では宇都宮の郷土玩具^{がんぐ}として、みんなに愛されているんだと。その上、黄ぶなのバスもできてよ、宇都宮の人々の足になっているんだよ。

これでおしまい

(再話／仁平恵美子)

黄ぶなは、宇都宮を代表する郷土玩具です。本来は、農家の副業に縁起物として作られていたそうです。

◆参考文献／「宇都宮の民話」 宇都宮市教育委員会 宇都宮市教育委員会社会教育課編